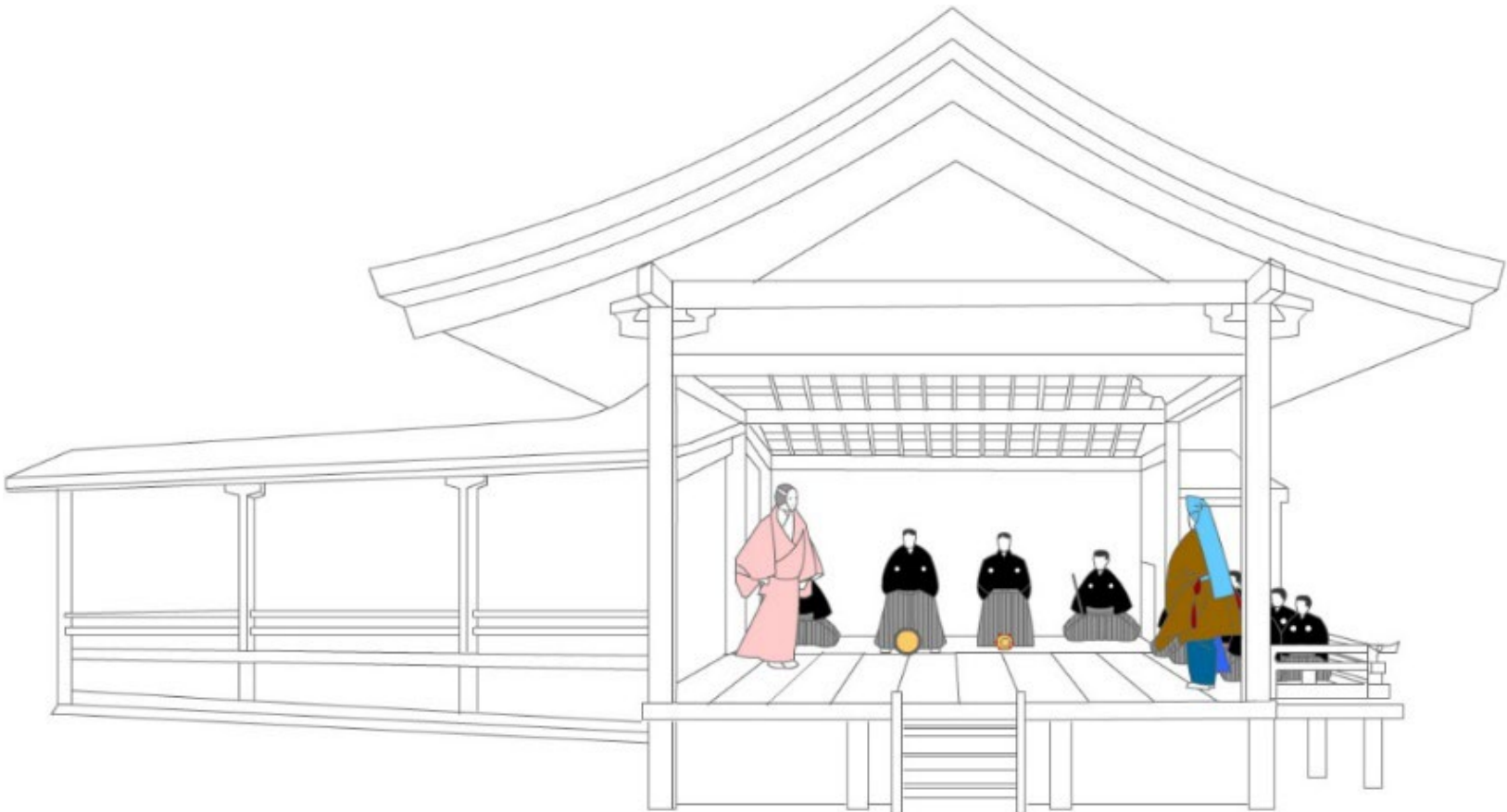


1 人生に効く古典文学（三）魂を鎮める能と世阿弥の智慧

2 ●今日の「人生に効く」処方箋

3 ワキのすすめ、初心忘るべからず、花、能を楽しむなど



1 能について

2 能の発生は未詳

3 本来あった「神事芸能」 + 中国からの「散楽」

4 能の大成

5 父・観阿弥（一二三三年～一三八四年）

6 子・世阿弥（一二六三年～一四四三年） 約650年前

7 世阿弥のしたこと

8 「夢幻能」の完成 夢幻能と現在能

9 古典の立体化↓2. 5次元

10 芸能論の著述（『風姿花伝（花伝書）』『至花道』など多数

11 江戸時代の能

12 式楽→トップマネジメントの芸能としての能

13 舞台と物語

14 シテとワキ

15 能『定家』シテ…前（女性）、後（式子内親王の霊）、ワキ、ワキツレ…北国からの僧、

16 来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩（もしお）の身もこがれつつ

17 見渡せば花ももみぢもなかりけり浦のとまやのあきの夕ぐれ

18

19 【構造】

20 《序》ワキの登場…北国から都への道行。

21 ワキの詠嘆…冬枯れと時雨。

22 《破》シテ・ワキの応対…時雨の亭の由来。

23 シテの物語…墓へ案内し、式子内親王と定家の恋物語を話す。

24 シテの中入り…本性を明かして 墓に消える。

25

26 《中入り》問狂言

27

28 《急》ワキの待受…弔い。

29 後ジテの登場…薦かずらに呪縛された姿。

30 ワキシテの応対…読経によるしばらくの解放。

31 シテの舞事…報恩の舞

32 結末…また定家葛にまどわれて姿を消す。

33

『定家』季十月

シテ…里の女、後シテ…式子内親王の靈

ワキ…旅僧　ワキツレ二人…從僧

《序》

ワキたちの登場…北国から都への道行

ワキ、ワキツレ二人

次第「山より出づる北時雨山より出づる北時雨行方や定なかるらん。

ワキ「これは北国方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。只今思ひ立ち都へ上り候。

道行「冬立つや。旅の衣の朝まだき。旅の衣の朝まだき。雲も行きかふ遠近の。山又山を越え過ぎて。紅葉に残るながめまで。花の都に着きにけり花の都に着きにけり。

ワキ「急ぎ候ふ程に。これは上京とかや申し候。心閑かに一見せばやと思ひ候。

ワキの詠嘆…冬枯れと時雨

面白や頃は神無月十日余。木々の梢も冬枯れて。枝に残の紅葉の色。所々の有様までも。都の景色は一しほの。眺ことなる夕かな。や。時雨が降り来りて候。これなる宿りに立ち寄り。時雨を晴らさばやと思ひ候。

《破》

シテ・ワキの応対…時雨の亭の由来

シテ「なうなう御僧。何しに其宿へは立ち寄せ給ひ候ふぞ。

ワキ「さん候唯今の時雨立ち寄りて候。(さてここをばいかなる所と申し候ぞ)

シテ「それは時雨の亭とてよしある所なり。其心をも知し召して立ち寄せ給ふかと。思へばかやうに申すなり。

ワキ「実に実にこれなる額を見れば。時雨の亭と書かれたり。折柄面白う候。さてこれは如何なる人の。建て置かせ給へる所にて候ふぞ。

シテ「これは藤原の定家の卿の建て置き給へる所なり。都の内とは申しながら。心すぐく時雨ものあはれなればとて此亭を建て置き。時雨の頃の年々は。こゝにて歌をも詠じ給ひしとなり。古跡といひ折柄といひ。其心をも知し召して。逆縁の法をも説き給ひて。彼御菩提を御弔ひあれと。勧め参らせん其ために。これまで現れ来りたり。

ワキ「さては藤原の定家の卿の建て置かせ給へる所かや。さてさて時雨をとどむる宿の。歌はいづれの言の葉やらん。

シテ「いやいづれとも定なき。時雨の頃の年々なれば。分きてそれとは申し難しきながら。時雨時を知るといふ心を。偽のなき世なりけり神無月。詞「誰が誠よりしぐれそめけん。此言がきに私の家にてと書かれたれば。もし此歌をや申すべき。

ワキ「実にあはれなる言の葉かな。さしも時雨はいつはりの。なき世に残る跡ながら。

シテ「人はあだなる古事を。語れば今も仮の世に。

ワキ「他生の縁は朽ちもせぬ。これぞ一樹の蔭の宿。

シテ「一河の流を汲みてだに。

ワキ「心を知れと。

シテ「折りからに。

地謡「今降るも。宿は昔の時雨にて。宿は昔の時雨にて。心澄みにし其人の。あはれを知るも夢の世の。実に定なや定家の。軒端の夕時雨。古きに帰る涙かな。庭も籬もそれとなく。荒のみ増さる叢の。露の宿も枯々に物すごき夕なりけりもの凄き夕なりけり。

シテの物語…墓へ案内し、式子内親王と定家の恋物語を話す

シテ「今日は志す日にて候ふ程に。墓所へ参り候ふ御参り候へかし。

ワキ「それこそ出家の望にて候へ。さらば御伴申さうずるにて候。
シテ「なうなう是なる石塔御覧候へ。」

ワキ「実に実にこれなるしるしを見れば。星霜ふりたるに蔦葛はひまとひて。形も見え分かず候。
さて是は如何なる人のしるしにて候ふぞ。」

シテ「これは式子内親王の御墓にて候。又此かづらをば定家葛と申し候。
ワキ「あら面白や定家葛とは。如何やうなる謂にて候ふぞ御物語り候へ。」

シテ「式子内親王始めは賀茂の斎の院に備はり給ひしが。程なく下り居させ給ひしを。定家の卿
忍び忍びの御契浅らず。その後式子内親王程なく空しくなり給ひしに。定家の執心葛とな
つて御墓にはひ纏ひ。互の苦み離れやらず。共に邪淫の妄執を。御経を読み弔ひ給はゞ。
なほなほ語り参らせ候はん。」

クリ「(地) 忘れぬものを古の。心の奥の信夫山。忍びて通ふ道芝の露の。世語よしぞなき。

サシ「(シテ) 今は玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば。

地謡「忍ぶる事の弱るなる。心の秋の花薄。穂に出でそめし契とて又枯々の中となりて。

シテ「昔は物を。思はざりし。」

地謡「後の心ぞ。はてしもなき。

クセ「あはれ知れ。霜より霜に朽ち果てて。世々に奮りにし山藍の。袖の涙の身の昔。憂き恋せ
じと御祓せし。賀茂の斎の院にしも。備はり給ふ身なれども。神や受けずもなりにけん。
人の契の色に出でけるぞ悲しき。包むとすれどあだし世の。あだなる中の名は洩れて。よ
その聞えは大方の。空恐ろしき日の光。雲の通路絶え果てゝ。乙女の姿とゞめ得ぬ。心ぞ
つらきもろともに。」

シテ「実にや嘆くとも。恋ふとも逢はん道やなき。

地謡「君かづらきの嶺の雲と。詠じけん心まで。思へばかゝる執心の。定家葛と身はなりて。

此御跡にいつとなく。離れもやらで蔦紅葉の。色こがれまとはり。荊の髪もむすばほ
れ。露霜に消えかへる妄執を助け給へや。

シテの中入り…本性を明かして 墓に消える

ロンギ「(地) 古りにし事を聞くからに。今日も程なくくれはとり。怪しや御身誰やらん。
シテ「誰とても。亡き身の果は浅茅生の。霜に朽ちにし名ばかりは。残りても猶よしぞなき。
地謡「よしや草葉の忍ぶとも。色には出でよ其名をも。
シテ「今は包まじ。
地謡「此上は。我こそ式子内親王。これまで見え来れども。誠の姿はかげろふの石に残す形だに。
それとも見えず蔦葛苦みを助け給へといふかとみ見えて失せにけり。いふかと見えて失せ
にけり。」

中入間

《急》

ワキの待受…弔いワキ、ワキツレ二人

待謡 「タベも過ぐる月影の。タベも過ぐる月影に。松風吹けてもの凄き草の蔭なる露の身を。思
ひの玉の数々に。弔ふ法ぞ誠なる弔ふ法ぞ誠なる

4 後ジテの登場… 薦かずらに呪縛された姿

5 シテ 「夢かよ闇の。現の。宇津の山。月にもたどる。薦の細道。昔は松風蘿月に詞をかはし。

6 翠帳紅閨に枕をならべ。

7 地謡 「さまさまなりし情の末（ワキ）。

8 シテ 「花も紅葉もちりぢりに。

9 地謡 「朝の雲（ワキ）。

10 シテ 「夕の雨と。

11 地謡 「古事も今の身も。夢も現も。幻も。共に無常の世となりて跡も残らず。何なかなかの

12 草の蔭。さらば葎の宿ならで。外はつれなき定家かづら。これ見給へや御僧。

13

14 ワキシテの応対… 読経によるしばらくの解放

15 ワキ 「あら痛はしの御有様やなあら痛はしや。仏平等説如一味雨。随衆生性。所受不同。

16 シテ 「御覽ぜよ身は仇波の起居だに。亡き跡までも苦の。定家葛に身を閉ぢられて。かゝる苦隙
17 なき所に。有難や。唯今読誦し給ふは薬草喻品よなう。

18 ワキ 「中々なれや此妙典に。洩るゝ草木のあらざれば。執心のかづらをかけ離れて。

19 仏道ならせ給ふべし。

20 シテ 「あら有難や。実にも実にも。これぞ妙なる法の教。

21 ワキ 「普き露の恵を受けて。

22 シテ 「二つもなく。

23 ワキ 「三つもなき。

24 地謡 「一味の御法の雨のしたゞり皆湿ひて。草木国土。悉皆成仏の機を得ぬれば。定家葛もかゝ
25 る涙も。ほろほろと解けひろぐれば。よろよと足弱車の火宅を。出でたる有難さよ。此

26 報恩にいざさらば。有りし雲居の花の袖。昔を今に返すなる。其舞姫の小忌衣。

27 シテ 「おもなの舞の。

28 地謡 「有様やな。

29

30 シテの舞事… 報恩の舞

31

32 《序ノ舞》

33

34 結末… また定家にまとわれて姿を消す

35 シテ 「おもなの舞の。有様やな。

36 地謡 「おもなや面はゆの。有様やな。

37 シテ 「本より此身は。

38 地謡 「月の顔ばせも。

39 シテ 「曇りがちに。

40 地謡 「桂の黛も。

41 シテ 「落ちぶるゝ涙の。

42 地謡 「露と消えてもつたなや薦の葉の。葛城の神姿。恥しやよしなや。夜の契の。夢の中にと有
43 りつる所に帰るは葛の葉の。元の如く。はひ纏はるゝや定家葛。はひ纏はるゝや定家葛の。
44 儚なくも形は埋れて。失せにけり。

45

ワキとは

- 1
- 2
- 3 分く〓あはひ〓境界
- 4 分からせる
- 5 分ける
- 6 人はなぜワキになるのか↓ワキのすすめ
- 7

世阿弥の芸能論**「初心忘るべからず」**

- 8
- 9
- 10
- 11 **「花」** 面白き、珍しき
- 12 「住する所なきを、まず花と知るべし」
- 13 「時に用ゆるをもて花と知るべし」
- 14 「年々去来の花を忘るべからず」
- 15 「秘すれば花」
- 16 「妙」「花」「面白」
- 17
- 18 「男時・女時」
- 19
- 20 「離見の見」
- 21
- 22 「して見てよきにつくべし。せずば善悪定めがたし」
- 23
- 24 「家、家にあらず。継ぐをもて家とす」
- 25
- 26 「命に終わりあり、能には果てあるべからず」

高砂や

待謠

帆を揚げてこの浦船に帆をあ
げて月もとて出汐の波の流
路の島かげや遠く鳴尾の沖過ぎ
て早位のくに着にけり早位のくに
に着にけり